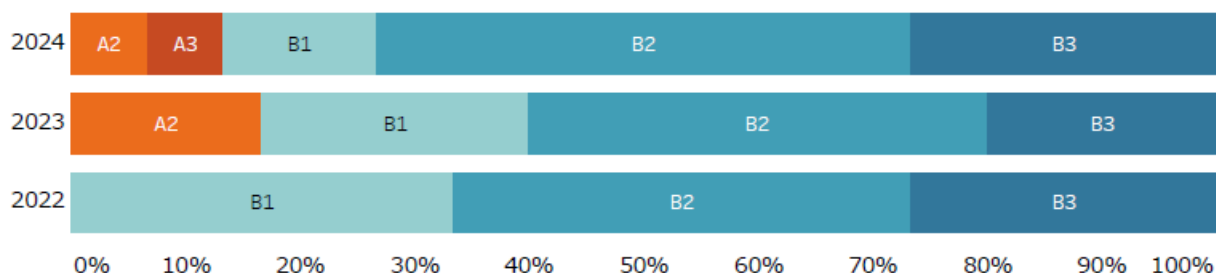


2024年 麻布 算数

過去3年の思考コード別出題割合は次のようになります。例年通り大問6題構成で、麻布で頻出の平面図形、速さ、規則に関する問題の出題でした。とりわけ、規則に関する問題では、ていねいに調べ上げる力が必須となります。やみくもに調べるのではなく、着眼点を定めて調べるのが大切です。また、問題の情報を読み取って、共通する部分や等しい部分がないかどうかを探し出し、活用していこうとする姿勢も大切です。



ここ数年、計算問題は見かけませんでしたが、今年は大問1で出題されました。手間はかかりますが、確実に処理をして得点したいです。大問2は、平面図形の問題でした。麻布に限らず、今年は多くの学校で「30度の三角形」が出題されている印象を受けます。(1)は、30度に着目します。三角形BCDは底辺6cm、高さ3cmとなりますが、これは(2)の布石となります。(2)は(1)を活用することがわかっているにもかかわらず、手が出なかった受験生も少なくないと思います。「30度の三角形」を利用するために、角の大きさが等しい部分に着目します。三角形PQSの辺PQと辺QRが重なるように三角形PQSを移動すると、三角形QS'Sが30度の二等辺三角形となります。気づきづらく、差がついたと思います。大問3は、流速の打ち消しを利用する流水算でした。ここは(1)、(2)どちらも得点しておきたいです。

大問4は、数を規則的に並べる問題でした。類題に触れたことのある受験生も多いと思います。正三角形の左端1、2、5、…、または右端の平方数、どちらに着目してもよいでしょう。ズレを起こさないように「際」となる部分に注意して調べます。(1)、(2)は確実に得点しておきたいです。

大問5は、円周上を移動する2人の旅人算でしたが、見慣れない問題でした。差がついたと思います。(1)は、進む速さの比9:4を利用して確実に得点します。次の(2)①から手が出なかった受験生が多かったと思います。速さの比が9:4から9:2に変化した点に注意して、比を使った式を利用します。比の処理に慣れていないと解法が立ちづらいため、ここは無理せず見送って、大問6へ進む方がよいと思います。大問6は大問4と同じく、規則に関する問題でした。数を順に並べて区切っていきます。こちらも類題に触れた経験のある受験生も多いと思います。正確に調べる力が必須となる問題です。(1)、(2)は確実に得点しておきたいです。

限られた時間をどこに費やすか、適切な判断が求められます。確実に得点できる問題、すでに触れたことのある典型題、ていねいに調べればなんとか答えにたどり着ける問題、手も足も出ない問題、・・・、問題のレベルを素早く見極める必要があります。あくまでも予想ですが、大問4(3)、大問5(2)①②、大問6(3)(4)を落としたとしても、およそ6割5分程度には達することができると思います。